Proof of Alice's Existence

間の間では常識とされていた。 れが『異界』への扉をくぐる行為だということは一部の人 ここではないいずこか、 昔から「神隠し」と呼ばれる現象は存在しており、 それが「発見」されたのはそう最近のことではな いくつも存在し得るといわれる並 此岸に対する彼岸、この世から

してこちらからアプローチする手段は長らく謎に包まれて だが、 が我々を招くことはあれど、 『異界』に対

界』と接続し、その中に『潜航』 我々のプロジェクトだ。人間の意識をこの世界に近しい『異 そのアプロー 『異界』の探査を開始した。 チを、ごく限定的ながらも可能としたのが する技術を手にした我々

『異界』では何が起こるかわからない。 向こう

> 接続者のサンプルとして秘密裏に選ばれたのが、 側で理不尽な死を迎える可能性も零とは言えない。 刑の執行

Xは問題なく『異界』の探査をこなしている。 への参加を承諾した。その心理は私にはわからな 彼は詳細をほとんど聞くこともなく、 我々のプロジェ

を受け取ることで、 とを繋ぐ命綱を頼りにたった一人で『潜航』するXの感覚 航』する。Xの視覚は私の前にあるディスプレイに、 は横に設置されたスピーカー 寝台に横たわる肉体を残して、Xの意識は『異界』に『潜 私たちは に繋がっている。肉体と意識 『異界』を知る。

かくして、 今日の 『潜航』 が、 始まる。

「発言を許可するけど、 X は、 好きなお菓

-----お菓子、

掛け合ってもいいかなと思って」 特別好きなものがあるなら、 、上に間

、そうですね……」 お気遣いありがとうございます。

「人間、体が資本ですから」

な糖分は、体にも頭にも必要なものですし」 食べすぎはもちろんよくないですが、適度

趣味の筋トレといい、

私たちよりよっぽ

「いえ、嫌いというわけではありません。

私には真似

和菓子の方が好きですね」 なお菓子ですよね。洋菓子と和菓子なら、 「あら、そうなの。でも、 和菓子といって

でしょうか」

|すあま……|

けたいところです。 「でも、 「わからなくはないけど、随分渋い 「食感と、控えめな甘さがいいですね しばらくのところは、

の言うと

もちろん好きですが、特に好きな和菓子 も色々あるけど。餡子が好きなのかしら」 「おはぎや羊羹など、 餡子を使ったものは

お菓子は避 わね

なんでもない日のXV私

ペーパーウェル 09 参加作品

シアワセモノマニア https://happymonomania.com/

青波零也 Aonami Reiya aonami@happymonomania.com Twitter: @aonami







Xは素足で-

-当然ながらサ

美しく整った、言い換えれば同 界』の住人たちだった。一様に 凹凸の少ない体に柔らかな光沢 じような姿をしている彼らは、 いわゆる「妖精」のような『異 蝶々や蜻蛉の翅を生やした-形を思わせる大きさの人間に、 び回っているのは、着せ替え人 「嬉しいね、王様も喜ぶよ」 そう言いながらXの周りを飛 お客様なんて久しぶりだね」

「王様の言うとおりにしない 「でもちょっと待って」 「王様はちょっと気難しい」 すぐに機嫌が悪くなる」

> 抜けた声を返す。その間にも、 の奥へと導いていく。 妖精たちはXをぐいぐいと通路 に、Xは「はあ」とどこか気の ちに八つ当たり」 「わたしたちも迷惑しちゃう」 この、外装も内装も色とりど あちこちから聞こえてくる声

るらしかった。毛足の長い絨毯 は、どうやら彼らの「城」であれた布で飾り立てられた建造物 ながら、果たして空飛ぶ妖精た をサンダル履きの足で踏みしめ ているのか、ということを考え ちにこの絨毯が何の意味を持っ るのをディスプレイ越しに眺め りの草花や鮮やかに染め上げら

会ってもらわないと」

をもつ薄絹を纏い、Xに群がる。

「さあさあ、さっそく王様に

ずにはいられない。 かり支度しないと」 「だから、王様に会う前に、しっ

「機嫌が悪くなったら、

あちこ

精を肩やら頭やらに載せた、冴真っ先に目に映ったのは、妖 えない顔をした男性-を開いてXを押し込んだ。 精たちは、通路の先にあった扉 高い声で「支度だ」と騒ぐ妖

たちがXから離れたかと思う そして、 鏡に映っている妖精

中のものを取り出そう

鏡になっていたのだった。 ばそこは大小さまざまな箱が積のは一枚の鏡だ。見渡してみれ 姿。要するに、扉の先にあった みあがった部屋で、一面の壁が X の

な顔にも構うことなく続ける。 としているいるようだ。 くちょく聞かれる言葉だが、ど いう言葉は『こちら側』でもちょ 唱和する。かわいいは正義、と める。しかし、妖精はXの怪訝 「さあ、 妖精が、明るい声で言う。 「かわいくないのはよくない」 「そんな格好かわいくない」 「王様は見た目にうるさいの」 「服を、ですか?」 よくない、と妖精たちの声が 唯一Xの頭の上に残っていた 鏡の中のXがわずかに眉を顰 着てるものを脱いで」

うも彼らの価値観では「かわい

い」かどうかは大事な要素であ

と、部屋中の箱にとりつく。 た。薄黄色をベースとした、と それは、奇妙な質感の布だっ

りと広がる袖に、腰から下を覆 だ。膨らんだ肩の辺りからふわ んデコレーションされていく。

ままになっていたが、指先で 上から被される。Xはされるが 飾った虹色のヴェールを、頭の 出来に満足しているのか、くる がドレスを更に彩っている。 散らされる、きらきら光る薄片 重ねられたスカート。布の上にうのは波のように幾重にも布が 「なんか、甘い匂いで、 ヴェールをつまみながら言う。 くるとXの周りを回りながら り頭の中年男性なわけだが。 りとした顔つきをした、 「仕上げにこれを被ってね」 「かわいい」と口々に言うのだ。 それでも妖精たちはドレスの ただし、着ているのはぼんや 真珠のような白銀の球体を いがぐ くらく

えられ、無地だった布がどんど 色、白に青。原色の花々が、布 精たちがよってたかってXの体 何とも鮮やかに映えるドレス つけられた花やリボンによって られる。そこに映るのは、飾り いでに、光沢のあるリボンも添 の上に飾り付けられていく。つ たのはつくりものの花。赤に黄 に巻き付けていく。 デーションのかかった布を、妖 ころどころに薄茶色の淡いグラ そこに、別の妖精が持ってき Xの視線がちらりと鏡に向け

ボンにもとりついてくる。裾やら、果てには履いているズ

様が見たらどうなるか!」

「こんなかわいくない格好、王

動じない割に、時折人並みの羞

恥心を垣間見せることがある。

脱いだ服が片っ端から妖精に

恥ずかしいのだろう。Xは我々

からどのような扱いを受けても

を通して我々に見られるのも気

くないのと同時に、自分の視界 いる辺り、妖精たちに見られた

「脱いで脱いで!」

「かわいくしてあげるんだか

やりはやめてください」 「すみません脱ぎますから無理

前に運ばれてくる。箱ののから出てきたものが目の

らしてきますね……」

よって持ち去られ、代わりに、

ら、早く早く!」

ちがXに向かってちいさな手を 見回していた。すると、妖精た ち着きのない様子で妖精たちを

表情こそ薄いが、どこか落

物色に戻ったのを確認してか 事をしながら離れて箱の中身の

ら、Xは服を脱ぎ始める。

視線を目の前の鏡から外して

伸ばして、トレーナーの袖やら

戸惑いを隠せない。鏡に映るX

ていないということも伺える。

の言う「かわいい」に相当し

同時に、Xの姿は彼

は抵抗があれど、無理やり脱が妖精たちの前で服を脱ぐのに

妖精たちに見つめられ、Xは

る。妖精たちが「はー

・い」と返

されるのは更に嫌だったと見え

もわからないのだ。 に漂う匂いがどんな甘さなのか 知ることはできない。Xの周り 伝わらない都合上、「匂い」を 々にはXの視覚と聴覚しか

が王様のお部屋だよ」 「どうぞどうぞお客様、この先 「これで王様の言うとおり!」

にXが座るにしても巨大すぎる には似つかわしくない、否、仮 座の間だった。小さな妖精たち たのとは別の扉から外に出る。 の間にか現れていた、入ってき ンダルも奪われていたー 妖精の言葉の通り、そこは玉 そこに腰かけているの いい

づいた唇を開く。 取られた目を細め、柔らかく色 人の「王様」は、長い睫毛に縁 を受けて、虹色の光を纏った巨 い、しかし妖精と言うよりも「巨は、妖精たちと同様に見目麗し 「王様、新しいお客様ですよ!」 人」という言葉が似合う存在。 Xを取り巻く妖精たちの言葉

唇を舐める。 く仕上がっていて、とても、」 「素敵なお客様だ。かわいらし 真っ赤な長い舌が、ぺろり、 おいしそうだ。

る。実際に経験こそしていない ああ、この状況には覚えがあ とある物語で読んだことが

ザンだったのかもしれない。 に定評のあるXが、宮沢賢治を えたのは、もしかすると、 キャラメルのリボン。真珠に見 生地に飾られた砂糖菓子の花に が纏わされているのはクレープ れそうになったように、今のX た紳士が己の体にクリームを塗 知っていたことには驚いたが。 タイトル。ものを知らないこと 呟かれたのは私の想像と同一の 「注文の多い、料理店……?」 西洋料理店『山猫軒』を訪れ どうやらXも気づいたのか、 お菓子は特に見た目が大事 酢をかけて、食卓に載せら そうだ、これは……。 アラ

> 様のお口に合いますよ」 わいらしさ」が。 だ。そう、言ってしまえば 「久しぶりのお客様、きっと王 「さあさあどうぞ王様」

許さない。その誰もが、愛らし 精たちが小さな体に似合わぬ力 に巨大な手を伸ばし も、無邪気な笑みを浮かべてX い笑みを浮かべている。「王様」 でまとわりつき、Xの身動きを Xは、長い長い溜息ととも その場から逃げようにも、妖

「『潜航』、継続不能と判断しま 引き上げてください

言った。